

研究報告

キウイフルーツの枝幹害虫キクビスカシバの生態と防除

愛媛県農林水産研究所 ^{くぼ} 窪 ^た 田 ^{せい} 聖 ^{いち} 一
 愛媛県果樹研究センター ^{かな} 金 ^{ごき} 崎 ^{しゅう} 秀 ^じ 司
 鳥取大学農学部 ^{なか} 中 ^{ひで} 秀 ^し 司

はじめに

キクビスカシバとコウモリガは、ともにキウイフルーツの枝幹部を加害する害虫として知られている。コウモリガはキウイフルーツのほかにもクリ、ブドウ、ナシ等幅広い果樹を加害する害虫としてよく知られていたが、キクビスカシバは2000年代に入るまでは成虫の採集例がわずかにあるだけで(有田・池田, 2000)、果樹での発生は知られていなかった。しかし、近年本種のキウイフルーツへの加害が九州を中心に認められており、2004年に福岡県、2011年に佐賀県、2012年に長崎県で特殊報が発表されている(福岡県病害虫防除所, 2004; 佐賀県病害虫防除所, 2011; 長崎県病害虫防除所, 2012)。愛媛県でもキウイフルーツの被害が認められたため、2011年に特殊報を発表した(愛媛県病害虫防除所, 2011)。本種の発生生態や防除等に関する報告は少ないため、愛媛県内において本種の加害状況、産卵・ふ化状況、フェロモントラップを用いた成虫の発生消長の調査、薬剤による防除試験を行ったので、その概要を紹介したい。

I 形態

本種の属する *Nokona* 属にはブドウの害虫として知られるブドウスカシバやムラサキスカシバが含まれるが、本種はそれらの種と比べて大型であり、開張(翅を広げた長さ)は雄が30~40 mm、雌が38~45 mmである。前翅は赤褐色、後翅は透明で、頭部、胸部、腹部は全体的に黒色であり、腹部第2, 4節に黄色の帯がある(口絵①)。

卵は長径約1 mmの平たい円盤状で小豆色をしており、中心部がややくぼんだ形状をしている。

終齢幼虫の体長は約40 mm、頭部および前胸背板は

赤褐色、腹部は淡い桃紫色をしている(口絵②)。

II 被害

卵からふ化した幼虫は、新梢の葉柄基部から食入する場合が多く、食入部位の葉は枯死する(口絵③)。また、食入部位によっては新梢全体が枯死する場合もあり、枯死しない場合でも新梢の伸長や葉色が悪くなる。愛媛県が多発園では、6月上旬ころには新梢での食害痕が多数確認されている。幼虫は成育するにつれて枝の基部方向に移動し、6月下旬には直径3~4 cm程度の枝での食害が認められる。この時期になると、幼虫食入部位から下方に向けて大量のフラス(虫糞とヤニが混ざったもの)が排出されるため、フラスを目印に幼虫が食入している部位が容易に特定できる。コウモリガの幼虫は、比較的幅広い面積にフラスを糸でしっかりと綴っているの、本種幼虫のフラスとは一見して識別可能である。

III 発生生態

1 寄主植物

本種の寄主植物としては、キウイフルーツのほか、同じマタタビ科マタタビ属のミヤママタタビやサルナシが知られているが(有田・池田, 2000)、確認例はわずかである。マタタビ科を寄主植物とするスカシバガ科昆虫は、少なくとも国内では本種のみである。

2 産卵部位と産卵消長

産卵部位は、葉柄の基部、枝の分岐部、果梗枝の基部等様々であり、主に分岐部やくぼみ等が選ばれる。特に葉柄の基部への産卵が多く、全体の約76%を占めた

表-1 キクビスカシバの産卵部位(窪田ら, 2017を改変)

産卵部位	産卵箇所数	割合 (%)
葉柄基部	45	76.3
枝分岐部	6	10.2
果梗枝基部	4	6.8
1年生枝上	2	3.4
葉柄痕上	2	3.4
合計	59	100.0

Biology and Control of *Nokona feralis* (Lepidoptera: Sesiidae) Damaging to the Branch of Kiwifruit. By Seiichi KUBOTA, Shuji KANAZAKI and Hideshi NAKA

(キーワード: キクビスカシバ, キウイフルーツ, 枝幹害虫, 卵越冬, 性フェロモントラップ)